

科目区分 学校教育実践コース(美術教育専修)、造形芸術コース
授業科目名 美術理論・美術史概説

グループワークについて

美術教育講座 稲次保夫

1、授業の概要

この授業の目的は、美や芸術について考えるということがどういうことかを知ることである。2 回生対象の授業で、本年度の受講者は 20 名であった。昨年度までこの授業は、おもに講義形式で行っていた。講義の内容は、(1) 古代ギリシアの美(2) 中世の美(3) ルネサンスの美(4) 17・18 世紀における美学の成立過程(5) カントの美学(6) 美学と芸術学(7) フィードラーの芸術学などであり、古代から近代に至るまで、西欧において美や芸術がどのように考察されてきたかを概観するものであった。昨年度は、これに引き続き、講読形式の授業も行った。しかし、使用したテキストが少し難しすぎたように思う(受講者だけでなく、授業担当者も難儀した)。ところで、講義形式や講読形式の授業は、とかくすると一方通行の授業になりがちであり、うまくいっても授業担当者 受講者のやりとりだけの授業になってしまう。そこで本年度は、初めての試みではあるがグループワークを取り入れ、受講者 受講者のやりとりを中心とするような授業の可能性を探ってみた。

2、授業の進め方

グループワークは、テキストの講読をもとに行なうことにした。使用するテキストは、誰もが読むことのできる易しい文章のものとし、皆が比較的なれ親しんでいると思われる近代・現代の美術のことを扱ったものを選んだ。

まず、皆でテキストを読んだ。その際、授業担当者は意見を述べたり問題を提起したりはせず、文章や語句に説明を加えたり、関連する作品を図版で紹介するだけにした。

次に、テキストを読んで生じた疑問や問題点を、

各自 A4 の紙に書いてレポートとした(宿題として、次回の授業時まで書いてくるように指示することもあった)。レポートには、箇条式のものも自問自答式のものもあった。いずれにせよ、大切なのは、自分にとって何が問題なのかを見出すことである。そのことを、授業担当者は繰り返し強調した。

このレポートをもとにして、グループワークを行った。受講者をランダムに、4つのグループ(1グループ4~5名)に分けた。司会・記録・発表などグループでの役割分担は、各グループ内での話し合いに任せた。グループでは、各自がレポートに記した疑問や問題点を出しあい、それらを突き合わせて検討することにした。他の人がどういふことを問題にしているのか。他の人の問題と自分の問題とはどのように関係するのか。また、「テキストを読む」とか「他者の言葉を聴く」ということは、一体どういうことなのか。そして、そもそも「言葉」とは何なのか。グループワークを通して、受講者には、こうしたことについて考えてほしかった。

この授業では、テキストの講読とグループワークに多くの時間がついやされた。それ以外にも、補完的な講義と、文章を書く練習をしたが、今回はこれらについての報告は省略する。

3、アンケートとその回答

アンケートは記述式のものとし、(一)テキストの講読について(二)グループワークについて(三)この授業全体について、それぞれ(1)よかったと思う点(2)よくなかったと思う点(3)ここをこうすればよいと思うこと、の記述を求めた。アンケートの回答には、授業内容に関すること、授業の形式や進め方に関すること、その他さ

まざまなものがあった。

そのうち、グループワークについては、以下のような回答があった。

(1)「ふだん聞くことのない、みんなの考えを知ることができた」「芸術についてのいろいろな意見がきけて楽しかった」「自分とはちがう意見がでてきておもしろかった」「少人数なので意見が述べやすかった」「活気感(？活気があるということか)」

(2)「なかなかうまく話し合いができないことがあった」「お互いが理解するのに時間がかかった」「しゃべる人としゃべらない人が班の中で別れてしまった」「みんなの意見がまとまらない」「先生もどう思うのか述べてほしい」「集中してできないときがあった」

(3)「みんなの自主性にまかせすぎで、少し戸惑うところがあった」「まず全体で意見を出し合い、どの疑問について話し合うかを、各グループで決めておけばいいと思う」「時間を制限して次々やる」「あまり脱線しないように」

4、いくつかの問題点

授業担当者にとって、グループワークを取り入れた授業は初めてだったので、とても難しかった。いろいろ試みようとしたが、要領をえず不手際なことが多かった。今後の授業改善に資するため、いくつかの問題点を挙げておく。

()当初の計画では、テキストは受講生が各自持ち寄ることにしていた。しかし結局、授業担当者の側がテキストを選定してしまった。受講生にとって身近な近代・現代の美術のことを扱ったテキストだったが、そのテキスト自体がかなり古いものであった。授業担当者としては、古いテキストだからこそ、私たちが考えるべき基本的な問題が含まれていると思うのであるが、アンケートの回答には「もっと最近の文章にも触れたい」というのがあった。やはり、初めの計画どおり、受講生が各自、たとえば本・雑誌・新聞・Webサイトなどから興味・関心のあるテキストを持ち寄り、それをもとにグループワークをしたほうがよかったのかもしれない。

()テキスト講読もグループワークも、かなりの時間をかけてゆっくりと行った。アンケートには、そのことをよしとする回答もあったが、「テンポがゆっくりだと退屈」とか「時間を制限して次々やる」という回答もあった。グループワークそれ自体のダイナミズムにもよることであるが、授業の進め方をどのようにすればいいのか、今後の課題の一つである。

()グループワークのあいだは、授業担当者は、各グループの話し合いには加わらなかった。初めてのことで、グループワークにおける教員の役割がよく分からず、グループワークのあいだは、教員は発言をできるだけ抑制した方がいいものと思っていた。しかしアンケートには、「みんなの自主性にまかせすぎ」とか「先生もどう思うのか述べてほしい」との回答もあった。授業担当者も、グループワークにもっと関わった方がよかったのかもしれない。少なくとも、「しゃべる人」の話を傾聴したり、「しゃべらない人」に話しかけたり。

5、ひとつの考察

たとえば「この花は赤い」ということの根拠は何なのだろう。プロタゴラスなら、「私が見て赤いと感じるから赤いのだ」と答えるであろう。だが、自らの感覚だけで事は足りるのであるだろうか。しかもプロタゴラスは、言葉(赤い)を私物化しているのではなからうか。グループワークにおいて最も警戒すべきは、プロタゴラス流の言葉の私物化であろう。グループワークが面白いのは、そこで使われる言葉が、一義的なものでも私的なものでもありえないからである。誰かが発言するたびに、言葉はそのつど新しい意味を帯びてゆく。私のものと思っていた言葉も、いつのまにか私のものではなくなってゆく。さらにいえば、言葉のそうした変容とともに、私自身が変質させられてゆくのである。グループワークの醍醐味とはそういうものである。言葉の解体と再構築、そうした生成的プロセスの兆しさえ感知されるなら、一見無駄と思われる言葉の遣り取りも、多少の「脱線」も許される。私はそう考える。